

「豚の飼育過程」の解説



母豚になるために

養豚経営では、繁殖と肥育の技術が経営成果に大きく影響します。

健康で数多くの子豚を産んでくれる母豚の能力が大切であることは言うまでもありません。

子豚を初めて産む準備は、母豚になるための候補豚を育成しなければなりません。養豚経営では、この候補豚をすべて自分の農場以外から購入する場合と、農場の候補豚を育成し、生産しようとする豚肉の質などを考え合わせて、飼育方法・エサや品種の掛け合わせなどいろいろな選択肢が考えられ、実行されています。

生後7ヶ月齢～8ヶ月齢になった候補豚に初めての種付けをするところから、繁殖豚の一生が始まります。



分娩と哺育

分娩が予定されている日の5日程前になると、母豚はふだん変わっている豚房から分娩房へ移動されます。

分娩房には分娩柵が設置されています。分娩柵とは、大きな母豚が子豚を圧死させないように工夫された柵です。

母豚の体重は約200kgあるので、子豚がまちがって下敷きになると圧死してしまう場合があるからです。

母豚からは1回当たり（1腹当たり）10頭前後の子豚が生まれます。生まれたときの体重は約1.5kgの小さな豚です。

生まれるとすぐに母豚の乳を飲みます。分娩直後5日間ほどの乳には免疫成分も含まれており子豚にとって大切な乳です。

母豚の乳を飲んで育つほ乳期間は20日～25日程度です。

子豚は、母豚から離乳されると子豚用に作られたミルク（粉状のエサ）のみで、飼育されるようになりますが、これに慣れるために、ほ乳中から餌付け用の飼料が与えられます。



種付け

子豚を離乳した母豚は、次の分娩のための種付けをします。

離乳後、1週間から10日までに種付けできることが理想です。

ほ乳期間25日、種付けまでの日数7日、妊娠期間114日とすると、その合計日数は、146日となり、365日÷146日とすると2.5となります。

計算上は、1年間に2.5回の分娩が可能です。母豚の健康状態や種付けできたかどうか、さらには人間と同じように流産といった事故も発生することもあり、計算どおり効率よく飼育するには、日常のきめ細かな飼育管理が必要です。

養豚経営の母豚には、良質の肉がたくさん取れる豚を数多く産むことが求められます。このためにメスの系統（品種、血統、資質等）やオスの系統も重視しています。多くの場合、子豚をたくさん産んで上手に育てる能力のあるメスに、良質の肉を生産する能力を期待できるオスを掛け合わせます。



母豚の飼育

母豚は、種付け⇒分娩⇒ほ乳⇒離乳・・・を繰り返します。

繁殖能力は、3産～4産目がピークでその後の繁殖能力は低下していきます。具体的には、1回の分娩で産める子豚の数が減ったり、弱い子豚が生まれたり、乳の出具合が悪くなったりします。

経営主の判断や母豚自身の能力にもよりますが、繁殖能力が落ちてきた母豚は、6産程度でとう汰されます。



子豚・肉豚の飼育

離乳時の子豚の体重は、5kg～6kg程度です。

まだ小さい豚ですが、それまで飼育されていた分娩房から子豚を飼育する豚房へ移動されます。

子豚は母豚から切り離されたことや、飼育の場所が変わること、乳から飼料に食べ物が変わることなど飼育環境が大きく変わることが原因で、この時期にお腹をこわしたりカゼを引いたりするなど体調を崩す子豚も多く見られることから、この時期の飼育には大変な注意が必要です。

1頭の豚が大きくなるまでに食べるエサの量は「豚の飼育過程」に示したとおりです。

エサは豚舎外部に設置された飼料タンクから、豚舎内に設置されたパイプを通してエサ箱に運ばれます。発育に応じて食べる飼料の内容が変わるので、同じエサを食べる豚は同じ場所に集められて飼育されています。

肉豚は180日齢前後で115kg以上になった頃に出荷されます。

※三重県内の養豚経営農家戸数等、畜産経営の統計数値は「三重の畜産広場」内[三重の畜産統計](#)に掲載のとおりです。

※文中の数値等は平均的なものであり、飼育方法等により異なります。